

非母語話者俳優を取り巻く人々のニーズ

羽澤志穂

本発表は、非母語話者俳優を取り巻く母語話者が非母語話者俳優の台詞の音声をどう考え、何を求めるのかを明らかにすることを目的とした調査報告である。

演劇は観られることを前提とした表現形式であり、俳優という職業は演劇制作者や観客等の様々な要求に応えられるということを示せなければ成り立たない。つまり、他者から評価されることが必然となる職業だと言える。これを踏まえ、非母語話者俳優が日本で俳優として活動するためには母語話者の評価を受けなければならないとし、ニーズ調査を行った。

調査は 10 名の母語話者に対し個別にインタビュー形式で行い、「非母語話者が話す日本語についての普段の態度や意識」「非母語話者俳優の台詞の音声についてどう思うか」について自由に語ってもらった。得られたデータはその内容により「非母語話者の音声一般に対する普段の意識」「演劇を観るときの態度やニーズ」「演劇作品を制作するときの態度やニーズ」に分類した。

この調査からは、普段は非母語話者の音声に寛容である評価者も、非母語話者俳優の台詞の音声には厳しい評価を行うことが示された。台詞には「外国語訛りのある音声」は受け入れられず、非母語話者俳優には「母語話者と同じ音声」を求めている。それは、芝居の目的が表現を伝える（表現が伝わる）ことにあり、そのためには観客のイメージを喚起しなければならない。しかし、外国語訛りがある音声ではその妨げになってしまう。非母語話者俳優は学習者である前に俳優であるとみなされる。日本語音声能力は俳優としての条件の一つであり、評価者には「母語話者と同じ音声」は「できて当たり前」という前提があることが明になった。